

「あら、目が覚めたようね。下等玩具クン…」

「意識が無くてもモノだけは立派に反応している、卑しい子」

「ふふっ…ここがどこかって？」

「その質問に答えて私に利益があるか教えてくれる？」

「何も考えなくていいわ。だってあなたは従順なおもちゃ」

「モノをおったてて、そこで寝ころんでいるだけでいいの」

「それにしても、すごい匂いだったわよ、あなたのおちんちん…」

「欲求不満で毎日シコシコしてる人特有の匂い…まさにゴミオスね…」

「今朝もしっかり抜いてきてる。これはティッシュの破片？」

「隠さなくていいよ、だってさっきから腰が動いているもの」

「素股でしてあげてる君のチンポ…私のおまんこに入りたいてさっきからグリグリ擦りつけてきてる」

「こーんなわけのわからない状況でもおまんこできるチャンスなら、って考えてるのかしら？」

「でも覚えておきなさい、ここで生きていたかったらご主人様の許可なく動かないで」

「じゃないとコレ、切り落とすことになるから」

「え？さっきから何を言ってるかわからない？人権を無視されてる？」

「まさか、君…まだ自分が人間だと思ってるのかしら？」

「ふふっ、あはははっ、何その顔は？」

「努力改善せずに劣等遺伝子をほったらかしにして日々ダラダラと過ごしてた君にはこれで十分」

「ちょっとくたびれた等身大デイルド一人形ってどこかしら」

「チンポ立てても許すまで感じちゃダメ、動いちゃダメ、イっちゃダメ」

「後は勝手に萎えるのもダメ。これさえ守ってれば玩具として生かしてあげるわ」

「ねえ、入れたい？私とおまんこしたい？」

「あはは、ダメダメ。入れるつもりだったけどもうダメよ」

「だって、玩具だって言ったでしょ？自分の意思を持ちちゃダメ」

「ねえ悔しい？自分の選択ミスでおまんこ出来ないの悔しい？」

「こんな風に擦ってあげる事ならできるけど？んっんっ…」

「ふふ…わかる？乳首がぶちゅぶちゅ君の肌に触れる感触が…」

「君には到底縁がないだろう女の子の温もり…スリスリされて気持ちいい？」

「あはは…すごい、暴れてる♪触ってもいないのにおちんちんビンビンになっているの」

「汁がとろって流れてきて…今にも暴発しそうほど血液降りてきてる♪」

「ねえ、ぬるぬるしたい？下半身もこうやってぬるぬるされたい？」

「ローションと泡に紛れて…劣等精液びゅびゅって私の肌にぶっかけたい？」

「きつとすごい気持ちいいわよ？ねえ？」

「…今度は無言になったわね…玩具としての立ち位置というのを理解できたのかしら」

「あら残念♪してあげるつもりだったのに、何も言ってくれないじゃ辞めるしかないわね」

「あはははっ！さっきより切ない顔♪二回もお預け食らって心底悲しいってわかるわ」

「なかなか面白いリアクションだけど…そういう感情も表に出しちゃダメ」

「これからじっくり…君を物言わぬ玩具に変えてあげるからね…」

「あら…ふふふっ…あらあらあら…」

「とうとう自分でシコり始めちゃった…本当に下等な生物なんだから…」

「誰がシコって良いて言ったの？その指を止めなさい」

「許可を下さい？ふふ…どうしようかしら…」

「このままおまんこもヌルヌルもシコシコもお預けしたら…どういう反応になるか見てみたいけど…」

「初日だから許してあげる♡このまま上半身ヌルヌルをオカズに、自分でシコシコしなさい」

「ありがとうございます…？感謝の言葉が言える豚なのね」

「でもキミ、いきなり監禁させられて、裸にされて寝かせられてるのに」

「ゴミオスの繁殖欲って本当にスゴいわね
状況把握よりシコれるオカズがあったらチンポいじってびゅっびゅが優先なんだ♡」

「ほら、乳首同士くっつけて…うふふ…敏感に跳ねちゃって…」

「情けないシコシコ。そんなに切ない顔されても下半身には一切触ってあげないから♡」

「んっくちゅんんっくちゅちゅっ」

「あら…？そんな切ない顔してどうしたのかしら？セックスはもちろんの事キスも慣れてないって感じね」

「初々しい反応が可愛い…」

「なーんて言ってもらえると思った？」

「ハッキリ言って落胆してるわ…これほどまでに商品価値が無い♫だとは思ってなかったもの」

「そんな事言ってもらえるのは妄想の女の子だけよ。
普通は経験が浅い♫なんて気持ち悪くてしかたないと思うわ」

「ご主人様と玩具っていう立場じゃなければ…こんな事にすら縁がない自分の身分の低さを知るべきね」

「くちゅっにゅちゅんんっ…!？」

「どういうつもりかしら…？自分から舌を絡ませてくるなんて」

「え？恋人同士ならキスを返したり舌を入れたりする…？」

「はあ…何度言わせる気かしら…」

「自分から動くなど言ったのよ…ご主人様に逆らうおもちゃは電池を切られるだけ。わからない？」

「今君がご主人様から許された動きは触ってもらえないちんちんをシコシコして…
その下等な精子を無駄打ちすることだけ」

「ほらほら、さっさとイっちゃいなさい」

「外の世界では絶対体験できない女の子との肌のふれあい、舌を絡ませるキス、しっかり噛み締めて
中田氏してるつもりになってびゅっびゅって♡」

「あはは、すっごい必死でシゴいてる♡イキたくて種付けしたくてすごい速さで擦ってる♡」

「私のご機嫌次第ではこの先おまんこのチャンスもあるかもよ♡ほら、さっさと射精なさい」

「ご主人様って言いながら…もっと激しくシゴいて♡」

「あはは♡出てる出てる。一生着床できない劣等遺伝子、腰をピクピクさせながらびゅびゅって出てる♡」

「ゲロみたいな喘ぎ声出しながらまだチンポが脈打ってる♡、ほんと情けない子」

「ふふ…まあ大体わかったわ…下等なおもちゃのくせに…自我と性欲だけは一人前みたいね…」

「調教のしがいがあるわ…じっくり焦らして自分から動かないように仕込んであげる」

「そうね…まずは次の調教までの間…一切自分のチンポに触れることを禁止にしようかしら」

「放置しておくとか今の思い出してシコシコしたくなるでしょ？それはダメ」

「監視カメラで見てるからシコったらわかるわよ。触れることも何かに擦りつけるのも許可しない」

「その代わりに…もしも守れたらヌルヌルや本番がメニューに加わるかもしれないわ」

「ふふっ…早速期待してピンピンになってる…本当に現金ないやらしい♫豚ね…」

「ただし、いつ次の調教に移るか…それは教えてあげない」

「一時間後かもしれないし…一週間後かもしれない」

「それまでシコシコしたい気持ちを我慢して、せいぜい時間が過ぎるのを耐える事ね」

「ごぶさたね…一人でシコシコせずにおとなしくしてたかしら？」

「ふふっ…目とチンポを血走りさせてご主人様って叫んでどうしたの？」

「モニターで見てたけど、君ほんとうにみじめだったわよ。」

「カメラに向かってご主人様お願いします、抜きに来てください、限界ですって」

「でもそんな元気もいづれなくなるわ」

ご主人様が入室したときだけ電源が入る都合のいいおもちゃになるのよ」

「しこしこ…しこしこ…」

「どうしたの？体をくねらせて…ピクピク動かして…」

「女の子の指気持ちいい？それともお預けされて敏感になって気持ちいい？」

「自分でやるのとは全然違うわよね…なにせ君手コキさえ縁のないゴミオス…だものね」

「柔らかい指に包まれて幸せな気分のところ悪いけど…」

「すごいキモいよ君」

「今日こそはおまんこできるかもって張り切ってる様がすごいキモイ」

「まだ2回目の調教なのに一生懸命ご主人様ご主人様って順応してるのがキモイ」

「期待と焦らしのせいでローション要らずでヌルヌルになってるのがキモイ」

「調教でもなければ一生女の子に握られることのないゴミチンポ…ヌメヌメしててすごい気持ち悪い」

「あら…これだけ罵倒されても気持ちよくなっちゃってるの？」

「女の子に密着されてシコシコされるの気持ちよすぎて、もうどうでも良い？」

「あはは…君ヒトとして終わってるわね」

「実に調教しやすいわ、すでにある程度出来上がってるもの」

「くちゅっ、ぺろっ、びちゃっ」

「うふふ…ピクンって飛び跳ねてる…乳首舐められて感じちゃったの？」

「ダメよ。シコシコしてあげることは許可したけど、まだ乳首で感じることは許してないわ」

「めったに経験できないから敏感なのはわかるけど…動かないで」

「ご主人様が舌先で乳首を遊び終わるまで我慢しなさい」

「ちゅるちゅる…びちゃっぺろっ、にゅちゅっ」

「あら…これはどういう事かしら…？チンポ握って5分も経ってないわよ」

「ずっと我慢してたところに手コキと乳首舐めが気持ちよすぎた…？聞いてないわ」

「なぜ勝手にイってるの？おしおきが必要なようね…」

「え、なに？射精したばかりの亀頭に素股を擦らないで欲しい？」

「勝手な子ね…さっきまではあんなにイキたがってたくせに」

「許可なくイった罰よ。ほら、おまんこのお肉、竿に触れてくちゅくちゅって」

「ほらほら、少し腰を振るだけでも挿入っちゃう距離、おまんこは間近よ」

「でも挿入してあげないわ。だってあまりにも必死すぎるんだもの」

「あはは、ほら、もう性欲が復活してる。
イったばかりなのに おまんこに入れたいよ～ってピンピンになってる♡」

「すりすりすり…このまま数センチでおまんこに入りそうな距離で…びゅっびゅっ」

「ほらほら、今度はイクことを許可してあげてるのに…何我慢してるのかしら？」

「え？長く楽しみたい？ここまでしてもらったのが初めてだから？」

「ダメダメ、早くって指示された時はさっさと出さなきゃダメ♡」

「君みたいな豚に彼女と一緒に温もりを共有する機会なんてこの先訪れると思う？
自分の意思で射精する権利なんて無いの。ご主人様の希望通りにする未来しかないわ」

「たとえプレイの中でもそんな甘い妄想に没入する資格があると思ってたの？」

「ほらほら永遠に彼女と一緒にイクなんてロマンスが訪れない下等チンポ♡」

「おまんこのお肉に挟まれてるだけで上等じゃない、ほら、ナカに入るまでもなくイキそうなんでしょ？」

「くちゅくちゅ…くちゅくちゅって…擦りつけて…」

「ふふ…さらに硬くなっていく…」

「んんっ…ああっ…これ、良い…」

「あっ…なんだか私も感じてきたかも…」

「いいわ、やっぱり一緒にイってあげる。このままもっと硬くして♡」

「あんっ、たくましいガチガチチンポっ！くりくりと当たってるっ」

「くちゅくちゅ擦れて…立派な竿で素股オナニーちゃうのっ♡」

「ああんっ好き♡このおチンポ好き♡」

「イかせて♡イかせて♡欲求不満の下等チンポで擦らせてえっ」

「…」

「はいお疲れ様…夢は見れたかしら…？」

「あら、何かしらその顔…まさか本当に自分のモノで女の子を感じさせられたと思っていたの？」

「ふふふ…あはははははっ」

「バカね…感じるわけじゃない♡君みたいな劣等遺伝子チンポで♡」

「私はキミなんかよりも優秀な精子の持ち主を何人も相手してるのよ」

「なぜこんな粗末なチンポで感じる必要があるのかしら？」

「自分のモノで女の子をイかせられた！って喜びからの落胆の顔…ああ、気分が良いわ」

「でも今は玩具としては合格よ。ご主人様が求めた場合は一緒に感じてイってよし♡」

「さて…今回は2回目の調教だけど…自分の立場とルールが把握できたかしら？」

「今回みたいにおとなしく待てを出来れば…玩具としての快感は与えてあげる」

「ただし、自分から気持ちよくなるうなんて考えないこと…カメラに向かって懇願するのも今後は禁止」

「理解できた？ならもう一度してあげるわ」

「しこしこしこ…ほらほら…あははっ、今日もおまんこできなかつたね♡」

「ナカにいれてもらえないダメチンポのまま精液どびゅどびゅって♡あははは。」

「…あらあら…早くも「待て」を覚えちゃったのかしら？」

「勃起しながら寝そべって…表情だけで早く抜いてくださいって言ってるわ」

「それじゃあ今日はパイズリの実践してあげようかしら」

「ふふっ…さっきより振り返ってる…もう待ちきれないって感じね」

「あはは♡ぬるぬるのおっぱいにチンポが挟まれてヒクヒクしてる♡」

「ふわふわのおっぱいにガチガチのチンポが飲み込まれていく様子…食い入るように見てる♡」

「おっぱいの質量がのしかかる感じ…もうたまらないよね？」

「こうやって…おっぱいをぐにゅぐにゅすると…」

「ふふ…肉の触感が波打つように…チンポに伝わって気持ちいいでしょ？」

「ねえ…このおっぱいの谷間からハミでる亀頭…ここに刺激が欲しいわよね？」

「舐めてほしいのかしら？さっきからビクビク動いてる…」

「あははっ、なにその頼み方？」

「僕の劣等遺伝子…間違っでご主人様に直床させる前に抜いてください？」

「たとえ中出ししたとしても、キミの精液が私に着床することなんてあり得とおもう？」

「外の世界でもここでも…誰にも着床させることなく一生を終える駄目チンポ♡」

「ご主人様から与えられる快感だけをエサに生きていくの♡」

「そこまで言うなら君の言う通り抜いてあげるわ…どびゅどびゅ無駄打ちがンばれ♡」

「でも良いって言うまで射精しちゃダメよ」

「私に来るまでシコシコせずになんか我慢してた敏感チンポ…耐え続けたらどうなるか見てみたいわ」

「べろっ…くちゅっ…にゅちゅっ…」

「ふふ…すでに限界が来てるようね」

「舌先だけでビクビク飛びはねてる♡」

「いい？口に入れてあげるけどまだ射精しちゃだ・め」

「んっ…んっ…くちゅっにゅちゅっ」

「ぶはあっ…」

「あはは、耐えてる耐えてる♡本当はとっくにイってるのに…」

「なあに？ご主人様のご機嫌を損ねてもうシコってもらえなくなる事だけは嫌って？」

「良い子ね…それだけが生きる意味になっちゃったものね…」

「じゃあご褒美をあげるわ、このままパイズリでイカされるか、口の中で出すか選ばせてあげる」

「ごっくんしていただけたら最大の光栄？…そうねえ…」

「じゃあダメ♡このまま胸に埋もれてあえなく射精、というシナリオにするわ」

「あはは、残念♡今日も二択に外れたね」

「ほらほらどうしたの？このままでも十分気持ちいけど、啞えてほしいわよね？」

「だったら、この谷間から抜け出るしかないわよ？
私が本気でパイズれば…君のチンポなんて、完全に隠れてしまうんだから」

「ほーら、腰を動かして。龟头だけでも顔を出したら、口で迎えに行っておける…」

「ふふ…下から突き上げるのは大変だけど、頑張っ♡」

「あはは、へこへこ情けなく動き始めた♡でも残念、全然私のお口には届いてないわよ？」

「それにそんなに擦ったら…私が動いてあげてる分も含めて、余計におっぱいに擦れて…」

「あっという間に果てちゃうわよ？あはっ、それでも動かしちゃうんだ♡」

「もうイっていいわよ。イキなさい、んふっ、下から啞えてほしくて必死な駄目チンポ♪」

「せめて口の中でびゅーって射精して、ごっくんさせてマーキングしたいよね？
その思いが強いほど擦れてイってしまいそうになる矛盾に耐えながらあっ…」

「このまま…おっぱいの中にびゅるるっ♡」

「あはは♡出てる、出てる、口まで届かない下等な精液、胸の中に埋もれて完結してる♡」

「まだまだ谷間でドクドク流れてる…上位の存在を汚すの気持ちいい？」

「君みたいな男が私にパイズリされただけでも上等だと思いなさい」

「でも…私の声に合わせてしっかり射精したタイミング…あれは玩具として高評価よ」

「だからご褒美…まだ出せるっていうのなら今度こそごっくん、してあげようかな？」

「ホント…ゴミオスってなんでこう現金なチンポの持ち主が多いのかしら？」

「いいわ、啞えてあげる…さらに体勢を変えて…」

「どう？いわゆる69の体勢よ」

「あははっ、食い入るように私のおまんこ見てる♡こんな近くでナマのモノを見るのは初めてかしら？」

「経験豊富だけど…しっかりケアしてるの♡みずみずしいピンクのままのナカが見える？」

「はむっんっくちゅっ…」

「きみもなめたければ…なめていいわよお…わたしのことイカせたいんでしょ」

「んっ…あんっ…ぶはあっ…」

「ふふ…一生懸命舌を動かしてるみたいけど…まあこんなものね」

「最初から期待してないわ…君にご主人様を気持ちよくさせるテクを仕込む気は無いの」

「恋人同士がするような上等な甘々なシックスナインを期待したかしら？」

「確かに君をイカせるのは私のフェラだけど…私がイクのは君のクニじゃないわ」

「君の舌におまんこ擦りつけて…私が気まぐれにオナニーしてるだけ♪」

「舌を動かしても良いけど…自分にオナナを気持ちよくさせるテクがあるなんて思いあがっちゃダメよ」

「んっ…あんっ…」

「んっ…じゅるっ…ずぞぞっ…」

「んっんっんっ…」

「んふっ…お口のなかでピクピク暴れてる…喉奥にぶちまけたくてたまらないって感じね」

「下手な舌使いもどんどん激しくなっていく、あはっ一緒にイキたいの？」

「素直に調教されてきたし…大サービス…いいわよ」

「私もイってあげる。君は君のタイミングで…口のナカに出て♡」

「はむっ…んんっ…」

「んんっ…んっ！んんっ！」

「んんっ…んっ…くちゅっ…ねちよっ…びちゃあ…」

「んっ…んっ…こくんっ」

「ぶはあっ…はい、ご苦労様♡ふふ…君の顔…ぐっしょぐしょね…」

「私も軽くイかせてもらったわ…良かったとはお世辞にも言えないけど」

「あはは♡うつろな目で天井を見上げて…ここまで派手に2回出したから…賢者タイムかしら？」

「冷静な思考になってやっと気づいたみたいね？この部屋から一生出れないって事と、一方的に快感を与えられ、ご主人様のオナニーの道具になるだけのこれからの♪」

「今まではどこかでこれが冗談やドッキリの可能性も考えて快感を楽しんでみたいだけ…」

「心配いらないわ…しっかり玩具としての役割を果たせば…ご主人様がお相手してあげる」

「何も考えずに…第三者にシてもらえるまで電源を切って「待て」してなさい♡」

「あはは♡ホントに現金なダメダメ勃起チンポ♡」

「こんな状況でも気持ちよくなればもうそれでいいんだ。終わってるね君」

「んっんんっほらほら♡またびゅーって出して♡」

「精子ぶちまけるだけの機械に…しっかり仕込んであげるわ」

「んんっ…んんっ…」

「はい、良くできました♡」

「調教の時間よゴミオス君、電源を入れていいわよ」

「ふふ…ここまで来ると完成間近ね…勃起さえも待てと良しを切り替えられるなんて…」

「今日はまたバイブりがいいかしら？それともフェラ…？尻コキや脇コキみたいなマニアックなものが良いかしら？」

「無言ね…もうこの程度のプレイじゃ君の感情は動かないのね…」

「上出来よ…ご主人様が良いついていうまで表情も変えちゃだめよ」

「それじゃあ…今日はおまんこさせてあげようかな？」

「あはは♡動いてる動いてる♪ほんとですか！？って起き上がっちゃった♡」

「感情出しちゃダメって言ったじゃない…まあおまんこさせてあげれば落ち着くかしら？」

「おまんこ本番をささやかれても動じない精神…それを手に入れて君は玩具として完成するのよ」

「あはは…ナマでさせてください？もちろん良いわよ」

「でも、着床できるかな？君みたいな下位の存在の精子が私を妊娠させられるかしら？」

「絶対に君の子なんて孕まない自信があるわ、だから好きなだけ中を出してみなさい」

「え？おまんこしてくれるんじゃないのか？って？」

「オナホールに突っ込むのとはわけが違うのよ。まずはご主人様の体をほぐすのが先なの」

「こうやって…体全体と一緒におまんこ擦りつけながら…んっ…ちよっとずつ濡らしていくのよ」

「ダメよ、腰を動かして挿入しようとしなくて」

「じっくり焦らして…ギッチギチになってからイれさせてあげる」

「だからご主人様が自分でイれるまで動かないで」

「はい、よくできました。んっ、硬さだけは一人前ね」

「ペロ…くちゅっ、にゅちよっ…」

「どうしたの…？恋人同士のセックスみたいで興奮する？」

「あはは、さっきより硬くなった♡これそんなに良かったんだ♡」

「こんなにピンピンになったら…イレた瞬間イっちゃいそうね…」

「ねえ入れたい？ニユルニユルのおまんこのナカ…くちゅくちゅヒダが絡みついて…」

「ご主人様より先にそのポンコツチンポびゆるるっ♪でイっちゃいたい？」

「うふ…すごい必死な頼み方♡中田氏したくてこれだけ擦られても必死で耐えてる♪」

「しょうがないわね…そろそろイレてあげる」

「んっ…んんっ…」

「んっ…挿入っちゃったあ…♡」

「んんっ、ナカでさらに硬くなった♡んっ…思ってたより…上等な玩具かも♡」

「ご主人様のナカあったかくてヌルヌルでぐちよぐちよで…すぐイっちゃいそう？」

「良いわよ。んっ…出しなさいっ」

「ご主人様より先にイっちゃう、ポンコツ玩具♡妊娠させられない上位存在に…下等な精液ぶちまけてっ♡」

「ほらほら、孕ませるチャンスよ♡
万が一着床する可能性に賭けて…必死に腰振ってマーキング♡」

「無駄になるの分かっててびゅっびゅって♡
ご主人様が許すからっ…子宮の奥にまで届けて願いながら…」

「んっ…ああっ！」

「んっ、出てる、出てる♡クズの精液、膈壁にしみ込んでる♡」

「ずっとおあずけされてたからすごい量…んっ、あったかい…」

「はい、お疲れ様…ゴミオスの精子でも暖を取るくらいはできるのね」

「え？何をしてるのかって？イったばかりなのに動かないで？」

「何を言ってるの？君にご奉仕するためにしてるんじゃないのよ」

「私が…んっ…まだイってないんだから…続けるに決まってるじゃない…んっ」

「あは♡すごい、すごい♪腰もチンポもビクンビクンって飛び跳ねてる♡」

「イったばかりの敏感な粘膜への刺激でうめき声上げてる♡」

「はあ…んっ…萎えちゃだめよ…ご主人様がまだ、楽しむんだから…」

「君の精液でさらにヌルヌルになったナカっ…ぐちゅぐちゅかき回して…」

「ほらほら、早く復活なさい、ダメチンポ硬くさせることだけがっ…存在意義なんだから♡」

「一緒にイってあげてもいいのよ…ご主人様を感じさせることが君の喜びなんでしょう？」

「あっ…んんっ…」

「イったばかりの敏感チンポ♡おまんこの刺激に耐えられずビクビクふるえてる♡」

「もう一度イっちゃったら、どうなるのかしら♡ああ…早く見せて」

「今頑張るなら、感じてあげてもいいのよ。ほらほら、はやく」

「いつも下等チンポと罵ってきた相手を…感じさせてイカせて…自分のモノにするチャンスかもよ？」

「ふふ…粘膜敏感なままピンピンになってる♡
体が回復する前に本能では種付けしたくてたまらないって感じ」

「あっ…ふうっ…んんっ…ああっ…」

「さっきより…断然いいッ…玩具といえど、喘いであげると、それなりにご主人様のために頑張るのね」

「んんっ…んんっ…」

「またイキそう？いいわ…今度は一緒にイってあげる」

「硬くて性欲だけは立派な劣等チンポ♡ご主人様のためだけに…あんっ、下から突き上げてっ…」

「イク…イっちゃう！クズの精子で妊娠しちゃうっ！！」

「あああっ！」

「あんっ…んんっ…んんっ…」

「はあ…はあ…んんっ…悪くなかったわよ…あは♡お互いに腰がまだ動いてる♡」

「ビクビク動いて…んっ、最後の一滴まで…あっ…」

「はい、お疲れ様。
感じてあげるだけでここまで頑張れるなら…ん、まだまだ遊べる玩具として価値があるかも」

「え？今のは演技ですかって…？さあね」

「あは、またナカで硬くなった♡」

「恋人同士のようなセックスを体験させてくれるならもっと頑張れる…？」

「いいわよ…何発できるか試してあげる。今度こそ妊娠させてやるってつもりで出してみなさい」

「はあっ…んっ…」

「うふふ…元気してたかしら？」

「すっかり出来上がっているわね…チンポもまったく反応してないわ」

「ほらほら…今日もご主人様のおまんこ…ナマでびゅっびゅっしてあ・げ・る」

「あらあら…完璧ね。本番をささやかれても表情すら変えないなんて」

「今日は総復習…ご主人様の許可が出るまで一切動いちやダメ」

「感情も表に出さないで、勃起もしちゃダメ」

「ほらほら…全身密着させて…素股にくちゅくちゅチンポ擦りつけてるわよ」

「あはは♡萎えたままのチンポぐにゅぐにゅするのって新鮮♡」

「最初の君だったら…とっくに勃起して勝手に腰振って
数秒でどびゅどびゅ射精していたのに…調教の成果かしら？」

「それじゃあまずは…勃起を許可してあげるわ、ほら、立たせて」

「んっ…♡すごいすごい、おまんこに擦られながらどんどん硬くなるチンポ
私の命令一つでムキムキになっていくっ」

「この無表情のまま一発抜いてあげようかしら♡」

「なんてね…ほら、感情出していいわよ」

「うわっ…ご主人様♡って甘えた顔とキモイ声で喘ぎだした…
許可しないほうが良かったかしら？」

「なあに…手コキされるの久しぶり？ご主人様の指、柔らかかあいですって？」

「中出しまでさせてあげたのに…これがたまらないんだ♡ふふ…ゴミオスの性欲は底なしね」

「んっくちゅっ…ぬちゅっ…れるっ」

「ほらほら、自分から動いていいわよ…舌絡ませてみて」

「リクエストに応じてあげるわ、君の望むプレイは何かしら？」

「この前みたいにいきなり挿入したい？」

「おあずけされた尻コキを体験してみたいですって？」

「いいわよ…こうやって…竿を尻肉で挟んで…」

「くっちょくっちょくっちょって…」

「私が腰を動かしてあげるから…そのままお尻のお肉の摩擦をチンポで感じるのよ」

「パイズリとはまた違う…？
張りのある尻肉がしっかり刺激を与えてくれる…？」

「もちろん日々、スタイル維持のため研鑽しているもの…あ、でも勘違いしないで？
君を喜ばせるためじゃないのよ？」

「君なんかよりも…レベルの高い本当の人間の男たちにこの体は磨かれ続けているのよ」

「あはは♡なに？その悲しそうな顔は？
私が君専属のご主人様じゃないことがそんなに悔しい？」

「じゃあせめてこの場だけは自分の物にしたいよね？」

「精液びゅっびゅっして…お尻にぶっかけてマーキング♡」

「自分のくっさい匂いを染みつけて…自分の物だって主張したいわよね？」

「ほらっほらっ…どんどん擦りつけを激しくするわよ？
思いつきりぶちまけたいわね…んっ…」

「腰を振らせてください？まだダメよ」

「いっぱいいっぱいお尻で擦りつけて…血液全部おチンポに凝縮させて…」

「最後の最後…もう一擦りでイキそうって時に許可してあげるわ」

「最後の一擦りで噴水のように汚いザーメンぶちまけるのよ」

「ほらほら…」

「あはは耐えてる耐えてる…感情許可したとたんキッショイ声で呻き始めてる♡」

「柔らかくて、ヌルヌルで、肉厚で、弾力もある尻肉に挟まれて幸せ？」

「そうよね…君みたいな玩具にはこれで十分♡」

「贅沢すぎる刺激でしょ？ほらほら」

「あはっ…お尻だけでこんなに気持ちよくなっちゃうんじゃ…もう本番はおあずけかな？」

「あら…そんなさみしそうな顔しないで、その分いっぱいぶっかけて気持ちよくなりましょうね」

「お尻にザーメンぶちまけて…この一発にすべて込めるつもりでマーキング♡」

「んっ…体くねらせて…うごめいて…もうびゅっびゅしたくてたまらないって感じね」

「それじゃあ、腰振りを許可するわ…ほら、下から上にぶにぶにしてお尻に擦りつけて♡」

「んっ…あはは…情けない腰振りイキたくてぶっかけてたくて…プライド捨てちゃってる♡」

「私の腰の動きと…君の腰の動きでぐっちょぐっちょに尻肉にチンポ擦りつけて…」

「ほら、どびゅるどびゅるってあえなく射精♪」

「ナカに到達するまでもなく摩擦に耐えきれないダメチンポ、もう我慢しないでっ」

「あはっタイミングばっちりの射精♡、君調教されすぎ…お尻に挟まれてたのに背中になでかかろう♡」

「はいご苦労様…よっぽどこれ気持ちよかったみたいね」

「お尻に挟まれながらビクビク脈打つ射精チンポ、なかなか面白かったわ」

「それじゃあこのまま…バックで挿入させてもらおうね」

「え…？本番はおあずけてさっき言ったじゃないかって？あは♡お馬鹿さん♪」

「一度本気で射精した後、ナカでする余力があるかどうかの実験に決まってるじゃない」

「それに…私が気持ちよくなってないの…んっ…ご主人様を放置して自分だけなんてダメよ」

「んっ…はあんっ…あっ…硬いっ…」

「んっんっんっ…」

「あは、ナカでさらに硬くなっていく♡クズのチンポでも鍛えれば連続プレイ可能なまでには成長するのね♡」

「んっ…ああっ…」

「生意気にも…私のおまんこの形に馴染んできたじゃない…あんっ…それとも、私のおまんこが…んっ、君のチンポの形をおぼえちゃったのかしら？」

「んっ…ああっ…はあんっ」

「逆方向に反り返ったチンポ♪奥まで届いて気持ちいい♡」

「前回あれだけ中出ししたけど…んっ新鮮な気持ちで楽しめそうね…ああんっ」

「え…ご主人様の中ぐちょぐちょに濡れてる？そうね…一人で気持ちよくなっちゃう君を見て…おチンポ欲しくなっちゃったのかも」

「んっ…デレてるご主人様可愛い？からかっちゃダメ♡ん…ああっ…」

「演技でもうれしいですね。もしかしたら本気かもよ？」

「数回にわたる調教で…少しだけ情が移っちゃったか・も」

「だから…んっ…このまま絞り出してっ…」

「前回から他の男に抱かれずに我慢してたのっ」

「ご無沙汰の欲求不満オマンコ、君のをイレたくてたまらなかったの♡」

「んっ…ああっ…突いてっ♡突いてっ♡ナカでどんどんバキバキになっていく下僕チンポイキたくて私の膣ヒダもキュウキュウ締め付けてるっ」

「子宮の奥の奥にぶちまけるつもりで…私の初めてを奪ってるつもりでっ」

「あんっ…着床しちゃうっ！今度こそクズの赤ちゃんできちゃうっ」

「ああっ…！！」

「あはあ…すっごいあったかあい…んっ…久しぶりだからオマンコ喜んでる…」

「さっきより断然濃くて量も多いじゃない…
よっぽど君のために我慢したっていう情報が良かったのね」

「まあ…君には演技かどうか確かめるすべはないんだけど…」

「え？抜いちやヤダ？…調子に乗ると相変わらずキモい甘え方するのね」

「お掃除は大事よ…こうして…ん…胸で挟んで…」

「ペロ…くちゅ…にゅちゅ…」

「龟头とカリの周囲に付着した体液を…んっ…キレイにしてから…んっ」

「あは…舌先でいじってあげたらまた硬くなった、
お掃除の最中なのに…もう一度射精したくてたまらないのね…」

「こうして…カリの周囲もきちんと…んっ…」

「んふ…またイキそうなの？我慢なさい…また正面から密着して本番させてあげる」

「クライマックスにふさわしい…以前よりもラブラブな雰囲気だね♡」

「んっ…あはは…上等よ♡3回目なのに…まだまだ硬い♡」

「今日は君の事…独り占めなの…全部全部搾り取ってあげるんだから…」

「好き♡」

「んっ…ああんっ…ナカでまたおつきくなったあ♡
台本に反応する単純チンポしゅきい♡」

「君のチンポじゃなきゃダメなのよ…ああんっもうっ…形がおぼえてるの♡」

「腕を回して…ギュッてしてっ♡乳首と乳首をくちゅくちゅって擦り合わせて…」

「目と目を合わせて…舌くちゅくちゅ絡ませて…金玉からっぽになるまでおまんこに出して♡」

「んっ…んんっ…くちゅっ…」

「腰を動かして…私が動かす方向に合わせて…んんっ…下から突き上げてえっ」

「あんっ…んっ…んんっ…」

「好き♡好き♡君のチンポしゅきっ」

「くちゅっぴちやっねちよっ」※耳舐め

「んっ…んんっ…」

「んふ…君のチンポ…ピクピクしてる…私のナカもどンドン締まっていくっ♡」

「一緒にイって♡体密着させながら…パンパンいやらしい音立てながらあっ…」

「この時だけ…君だけのおまんこになってあげる♡だからもっと、もっと♡」

「イク、いっちゃう！硬いだけが取り柄のチンポにイカされちゃう！」

「ああっ…！！」

「んっ…ふう…あっ…」

「あっ…ああっ…さっきよりも熱い…」

「んっ…駄目…手を離しちゃうヤダ。このままが良いの♡つながつたまま…何回も出して♡」

「今日はどうしたんですか？って…さあね…」

「演技じゃないかもよ？
君が調教を終えて…私だけの物じゃなくなるのがちよっと惜しいって思ってるし」

「完成した玩具は…他のご主人様にもお披露目しないとイケないのよ」

「だから今日だけは…こうして君の事独り占めにしたいな♡
君も…んっ…カノジョだと思っていっぱいして欲しい」

「好きです…？駄目よ本気になっちゃ」

「でも…今だけ…君の調教卒業記念に…恋人になってあ・げ・る」

「んっ…ああっ…またナカで硬く…」

「んんっ…腰を振り始めちゃって…ああんっ」

「良いわよ…何回でも射精させてあげる…」

「今後はご主人様たちの言う事、よく聞いて玩具としての使命を果たしなさい…んっ…」

「それが出来たら…たまにはこうやって…恋人ごっこしてあげるからっ…ああっ…」

(完)